

## 国立劇場のさよなら公演

大塚 喜子

三宅坂の「国立劇場」が建て替わると聞いた。築六十年で取り壊すのは何とも勿体ない。幕見はないが、観劇料が歌舞伎座より三割安いのが有難い。

新たな「国立劇場」が7年後の2029年にオープンすると、三宅坂界隈はホテルや大使館も並ぶ、わが国最大の文化拠点になるとか……？

然らば、サヨナラ公演の「義経千本桜」を観ようと夫を誘ったが、コロナが気になるらしく「自分は7年後に行くヨ」という。7年後の我々夫婦なんて想像できない（私は兎も角として？）一人で行くことにした。お上から頂戴した10万円のお宝が財布の中で出番を待っている。

三宅坂駅から国立劇場に至る10分程の道を歩きだした。紬の裾は気持ちよく捌けるのに、草履の鼻緒がきつくて、痛い。無理もない4年ぶりの（おめかし）だ。これも、あれも、コロナが悪いのだ。

最高裁判所の前で立ち止まって一休み。畏敬の念で「法服の王国」見上げると、痛みがスーと消えた。更に進んで外壁が校倉造りの国立劇場に辿り着いた。確りと見納めようと位置を変えながら、スマホでシャカ・シャカ……。撮り鉄の気分だ。横で高齢男性が腕組みをして静かに建物に見入っているのを見ると、夫と一緒に来なかったことを悔やんだ。

● ● ●  
杵の音が入って、目を閉じると、清元が語りだした。

「恋と忠義はいづれが重い 掛けて思いは計りなや〜」浄瑠璃との掛け合いが始まって、目を開けると、吉野山の桜を背にした、菊之助の忠信と時蔵の静御前が……。私の涙腺は制御不能になった。

七年前、国立劇場のこの辺りの席から、母と一緒に見たのは中村吉右衛門の忠信と坂東玉三郎の静御前だった。その母も吉右衛門も今は亡き人になった。

コロナ明けの劇場内は正月のような華やかさだ。財布に未だお宝がタップリ残っている。来月は二人揃って歌舞伎座での十三代目・市川團十郎の「助六」と「勸進帳」を観ると決めた。夫に有無は言わせない。

おわり

